

内容分析的手法による民族関係分析の試み・下

— 1930年代の『大阪朝日』にみる朝鮮人報道の
特徴と日朝民族関係のパターン —

山中 速人

5. 主なクロス分析と結果の考察

A 変数の設定とコーディング

次に、多次元分析とクロス分析のために設定した変数群とそのコーディングの基準を述べたい。本研究が分析のために選んだ変数は次の12変数である。

- (1) 内容分類, (2) 掲載時期, (3) 言及地, (4) 記事形態, (5) 写真の有無, (6) 見出し段数, (7) 記事量, (8) 朝一夕刊別, (9) 日本人の朝鮮人に対する性向, (10) 朝鮮人の日本人に対する性向,

(11) 日本人と朝鮮人との友好度, (12) 新聞の朝鮮人に対する評価

(1)は内容分類, (2)~(8)は, 主に記事形態や時期, 量など外面的ファクターに属する特徴, (9)~(11)は, 日本人—朝鮮人間の民族関係を測定するための変数, (12)は, 新聞の評価に関するものである。次に, これらの変数群の個々のコーディングの基準を明らかにする。

(1) 内容分類

失述の内容一覧をもとに, 多次元分析のための分類カテゴリーを設定した。表6は, 多次元分析

表6 分析のための内容分類 (変数1のカテゴリー) と内容一覧表との対応関係

	記事数	(%)
① 朝鮮問題一般, 朝鮮政策.....	30	(11.5)
I-A 総督府, II-A-2 総督府の失業対策, III-A 朝鮮の教育政策, IV-A 朝鮮人志願兵関係の一部・V-A 在満州朝鮮人問題の一部, VI-A 朝鮮の農業政策, VII その他		
② 在日朝鮮人政策, 社会事業.....	38	(14.6)
I-B 朝鮮人参政権, II-A-3 日本における朝鮮人社政策・社会事業, II-A-4 内鮮融和の一部, III-B-1 未就学児問題の一部, III-B-2 その他 (在日朝鮮人の教育)の一部		
③ 朝鮮人の社会問題.....	11	(4.2)
III-A-1 社会問題, III-B-1 未就学児問題の一部, V-A 在満州朝鮮人問題の一部		
④ 朝鮮人の社会運動.....	33	(12.6)
I-C-3 学生運動, I-C-4 民族運動, II-B 労働運動・争議, III-B-2 その他 (在日朝鮮人の教育)の一部		
⑤ 朝鮮人の左翼運動.....	27	(10.3)
I-C-1 朝鮮の共産主義運動, I-C-2 その他の左翼運動		
⑥ 暴力犯罪.....	37	(14.2)
II-C-1 凶悪犯罪, II-C-2 粗暴犯罪		
⑦ 一般犯罪.....	38	(14.6)
II-C-3 窃盗, II-C-4 知能犯罪, II-C-5 風俗犯罪, II-C-6 その他		
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出.....	27	(10.3)
II-A-4 内鮮融和の一部, II-D-1 個人の美談善行, II-D-2 献金, II-D-4 朝鮮人の社会進出, II-D-6 その他の一部, III-B-2 その他 (在日朝鮮の教育)の一部, IV-A 朝鮮人志願兵関係の一部		
⑨ その他の出来事.....	20	(7.7)
II-D-3 たずね人, II-D-5 自殺, II-D-6 その他の一部		

のための分類カテゴリーと内容一覧表との対応関係ならびに記事数を示すものである。この作業の意味は、各カテゴリーの絶対値をそろえ、分析の精度を高めることと、日本人—朝鮮人間の民族関係の分析に適したカテゴリーに分類基準を改めることにある。ただ、朝鮮人の社会問題については、カテゴリーを構成する記事数が5パーセントを切らざるを得なかった。一般に数量化理論第Ⅲ類の分析では、絶対数の小さいカテゴリーほど、全体の分析結果に実勢以上の影響を与える場合があることが知られている。この点についての危惧はあったが、結果的にいえば、今回の分析に関しては、この5パーセントは、それほど重大な影響を及ぼさなかった。

(2) 掲載時期

掲載時期は、朝鮮人「移民」に影響を与えた2つの出来事、「満州事変」(1931年9月)の勃発と、日本政府が朝鮮人の日本への移住を制限し、満州に振り向けることを決定した「朝鮮人移住対策の件」の発行(1934年10月)を境に3つの時期に区別した。

	(%)
① 前期(1929.1—1931.9)	137(52.5)
② 中期(1931.10—1934.10)	84(32.2)
③ 後期(1934.11—1938.12)	40(15.3)

(3) 言及地

① 朝鮮・「外地」	73(28.0)
② 日本内で大阪以外	20(7.7)
③ 大阪府下	168(64.3)

以上の3地域を設定した。日本以外は、ほぼ全数朝鮮である。

(4) 記事形態

① 一般記事(一般報道記事)	243(93.1)
② 特殊記事(社説, かこみ, 連載, 写真特集, コラム)	18(6.9)

特殊記事は、一般報道記事以外をすべてひとまとめた。

(5) 写真の有無

① 写真使用	26(10.0)
② 写真の不使用	235(90.0)

記事に写真を入れるという作業は、今日に比べてはるかに取材上に課される条件は大きかったはずである。このような仮定に立って、写真の有無が記事の他の特徴とどう結びつくか分析する目的

で、この変数を加えた。結果としては、予想したほどの意味はなかった。

(6) 見出し段数

① 1段	81(31.0)
② 2段	102(39.1)
③ 3段	60(23.0)
④ 4段以上	18(6.9)

新聞がこの記事に与える重要度の尺度として見出し段数を変数とした。

(7) 記事量

六段階の尺度を設定した。縮刷版の正確な縮度率を確定できなかったため、ここでは、縮刷版の面積で仮に表示している。表示は、コラム×センチメートルである。

① 1—50未満	38(14.6)
② 50—100未満	73(28.0)
③ 100—150未満	50(19.1)
④ 150—200未満	36(13.8)
⑤ 200—300未満	30(11.5)
⑥ 300以上	34(13.0)

(8) 朝刊—夕刊別

① 朝刊	212(81.2)
② 夕刊	49(18.8)

(9) 日本人の朝鮮人に対する性向

① 求心的	74(28.4)
② どちらともいえない, 言及していない	159(60.9)
③ 遠心的	28(10.7)

(10) 朝鮮人の日本人に対する性向

① 求心的	63(24.1)
② どちらともいえない, 言及していない	140(53.8)
③ 遠心的	58(22.1)

シマホーンの民族関係の枠組(支配的民族の性向と被支配的民族の性向が、それぞれ求心的であるか遠心的であるか)を使って、ここでは、新聞が掲載した朝鮮人関係記事中の日朝間の民族関係を日本人の朝鮮人に対する性向が求心的か遠心的か、また、朝鮮人の日本人に対する性向が求心的か遠心的かとして、変数⑨と⑩によって代表させた。ところで、はじめに求心的、遠心的という概念を操作化しておかねばならないが、それは以下にあげるものである。

- 求心的……「ひとつ」になろうとする性向。同じ言葉を使う。同じ教育を受ける。文化や習慣を模倣する。協同で何かをする。同じ処遇を述める。近くに住む。結婚する。社会に参加する。保護を求める。利益を分かち合う。同一視する。などの傾向を指す。
- 遠心的……「ひとつ、ひとつ」でいようとする性向。相手から独立を求める。独自の文化や習慣を保存する。離れて住む。利益を分け与えない。仲間や組織に加えない。別々の言葉を使う。独自の教育を行なう。区別する。などの傾向を指す。

記事中にこれらの意味をふくむものをそれぞれのカテゴリーに分類し、これらの性向とは無関係なもの、言及のないもの、明瞭でないものはニュートラルなものとして処理した。

(11) 日本人と朝鮮人の友好度

- ① 非常に友好的 28(10.7)
- ② 友好的 31(11.9)
- ③ どちらともいえない、普通 101(38.7)
- ④ 対立的 47(18.0)
- ⑤ 敵対的 54(20.7)

シマホーンの理論におけるコンフリクトの存在を測定する尺度として設定した。①「非常に友好的」は、記事中に日本人と朝鮮人がともに登場し、友好的な接触を行なっているもの、あるいは、「親しく」「仲良く」「親身になって」「交歓」などの友好性を示す表現がみられるもの。②「友好的」は、文脈から友好的関係が予想されるもの、④「対立的」は、相方が物理的衝突にいたらなくても、対立関係があきらかなもの。⑤「敵対的」は、物理的衝突、権力による鎮圧など行動レベルで対立が発生した場合を指す。

(12) 新聞の朝鮮人に対する評価

- ① 好意的 29(11.1)
- ② やや好意的 39(14.9)
- ③ どちらともいえない 86(33.0)
- ④ やや非好意的 65(24.9)
- ⑤ 非好意的 42(16.1)

①「好意的」、⑤「非好意的」とも、見出し語中に、評価の表現をふくむものを指し、②「やや好意的」、④「やや非好意的」は、記事本文の文脈によって判別されたものである。正確には、判

定者群を設定し、その平均をもって測定すべきであるが、判定者の民族属性などからくるバイアスをどのように考慮に入れるべきか、現状では結論づけができないので、多少、信頼性に難点はあるが上述のような尺度をもって量化した。

以下分析に移る。

B 主要なクロス分析と結果の考察

1 朝鮮(人)に対する関心の推移
(①見出段数×②掲載時期・年次)

表7 年別×見出し段数別記事数

	1段	2段	3段	4段以上
1929(昭4)年	14	23	5	1
30	28	25	11	2
31	9	21	8	2
32	11	13	10	6
33	6	5	6	2
34	4	6	6	0
35	3	7	5	3
36	2	1	6	0
37	2	0	0	1
38	1	3	2	1

表7は、見出し段数別の記事数が年を追うごとに、どのように変化するかを示したものである。総記事数の減少傾向は、さきほども述べたが、これのみで分かることは、3段以上の比較的規模の大きい記事は、多少のバラツキはあるものの、それほど大幅な減少は示していないのに対して、1～2段の小中規模の記事の減少が顕著である点である。したがって35年ころまでをみると、年を追うごとに3段以上の記事の占める割合は上昇している。次に、前・中・後期の3期の各時期の見出し段数記事数を比較すると表8ようになった。これをもても、1～2段の小中規模の記事の減少傾向が顕著であることがうかがえる。比較的中小規模の記事が急速に減少したという事実は、ニュース・バリューの低いこまごまとした朝鮮(人)関連の雑報が減少したということであり、日常的话题から朝鮮(人)が遠のいていったことを意味している。また、後期の記事が少ないのは、朝鮮人移住の満州への振り向けによって、日本内の朝鮮人に対する関心が一層急速に薄れていったことを示している。

表8 掲載時期×見出し段数(記事重要度)

掲載時期 \ 見出し段数	1段	2段	3段	4段以上	合計	重要度スコア*
前期 (満州事変まで)	50 36.5	63 46.0	19 13.9	5 3.6	137 100%	1.85
中期 (移住対策の件まで)	23 27.4	27 32.1	26 31.0	8 9.5	84 100%	2.21
後期	8 20.0	12 30.0	15 37.5	5 12.5	40 100%	2.43

※重要度スコア……見出し段数別の記事数にそれぞれ見出し段数を掛けたものを合計して、それを記事数合計で割ったもの。例えば、上記の「前期」では次のようになる。
 $(1 \times 50 + 2 \times 63 + 3 \times 19 + 4 \times 5) \div 137 = 1.85$
 1.85が重要度スコアである。

2 内容別の変化のパターン ((1)内容分類×(2)掲載時期)

年を追うごとに記事数が減少するのが、一般的傾向であると述べたが、これを記事内容別に捉えてみるとやや異なった傾向を示すのに気付く。表9は、内容分類と掲載時期のクロス集計であるが、内容別の変化に5つのパターンがあることがわかる。

- (1) パターンⅠ (前期→中期→後期と減少するもの) ①朝鮮問題一般、朝鮮政策、③朝鮮人の社会問題、④朝鮮人の社会運動、⑥暴力犯罪
- (2) パターンⅡ (前期、中期は一定であるが、後期に急減するもの) ⑤朝鮮人の左翼運動、⑨その他の出来事
- (3) パターンⅢ (前期、中期、後期とも掲載数が一定のもの) ②在日朝鮮人対策・社会事業、
- (4) パターンⅣ (中期の掲載数が最大で後期で減少するもの) ⑧美談・献金・朝鮮人の社会進

出

(5) パターンⅤ (中期の掲載数が最少で、後期にもちなおすもの) ⑦一般犯罪

パターンⅠやパターンⅡに属するものは、全体の傾向をもっとも強く反映しているものであり、朝鮮問題への一般の関心の減少をストレートに反映している。しかし、ここで注目すべきは、パターンⅣの美談・献金・朝鮮人の社会進出などの融和主義的色彩を帯びた記事が満州事変後に顕著にあらわれ、日本への移住制限が始まると再び減少していることである。これは、満州事変に際しては、日本と朝鮮の一体化を強調し、国内の排外主義的な統合を推進する新聞のリアルな一面をのぞかせたものである。逆に、パターンⅤやパターンⅠの犯罪に関する記事が、中期で減少を示すのも、戦時下体制へ移行する社会にあって、社会不安を生む素材の報道を抑制する新聞の傾向を示すものといえよう。また、在日朝鮮人に対する社会政策・社会事業の記事の減少がゆるやかなことは、「内

表9 内容分類×掲載時期

	前 期	中 期	後 期	変 化 の パ タ ー ン
① 朝鮮問題一般、朝鮮政策	23 16.8	6 7.1	1 2.5	I
② 在日朝鮮人政策・社会事業	16 11.7	11 13.1	11 27.5	Ⅲ
③ 朝鮮人の社会問題	9 6.6	2 2.4	0 0	I
④ 朝鮮人の社会運動	21 15.3	11 13.1	1 2.5	I
⑤ 朝鮮人の左翼運動	12 8.8	12 14.3	3 7.5	Ⅱ
⑥ 暴力犯罪	27 19.7	8 9.5	2 5.0	I
⑦ 一般犯罪	14 10.2	8 9.5	16 40.0	Ⅴ
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出	5 3.6	18 21.4	4 10.0	Ⅳ
⑨ その他の出来事	10 7.3	8 9.5	2 5.0	Ⅱ
合 計	137 100%	84 100%	42 100%	

鮮融和」の働きかけが恒常的に行なわれていたことをものがたっている。

ただ、このクロスだけでは、そこまで深読みすることは、危険であるかもしれない。それに、分析上の三つの時期は、物理的には、前期、中期、後期と進むにつれ、期間が長くなるので、一定期間あたりの記事掲載頻度は、やはり年を追うごとに低くなる。時期別の内容上の変化については、後でさらに詳しく分析を試みることにし、次に移る。

3 内容別の記事重要度と新聞の評価
 ((1)内容分類×(6)見出し段数, (1)内容分類×(12)新聞の朝鮮人に対する評価)

表10は、内容分類と見出し段数のクロス集計の結果である。特徴的なのは、⑤朝鮮人の左翼運動、④朝鮮人の社会運動が比較的大きくとりあつかわれていることである。これに対して、①朝鮮人問題一般、朝鮮政策、②在日朝鮮人政策・社会事業、⑥暴力犯罪、⑧美談・献金・朝鮮人の社会進出は、相対的に扱いが小さいことである。

次に、新聞の朝鮮人に対する評価との関連(表11)をみでみる。⑧美談・献金・朝鮮人の社会進出、③朝鮮人の社会問題、⑨その他の出来事に新聞の評価は高く、⑤朝鮮人の左翼運動、⑥⑦犯罪、④朝鮮人の社会運動に新聞の評価は低くあらわれ

ている。これと先程の内容別の記事重要度とをつきあわせると、非好意的評価が強く示される朝鮮人の政治・社会運動に対して、新聞が大きく扱いをしているということがわかる。新聞が朝鮮人の民族的抵抗にどれだけ敏感に反応していたかをここから知ることができる。これに対して、同じように非好意的評価が強く示される記事であっても、非政治的な犯罪などについては、扱いは小さい。一方、住宅問題など、在日朝鮮人の社会問題に対しては、新聞は好意的で、かつ紙面の扱いは比較的大きい。これは、内鮮融和の促進という方針と関係が深く、新聞は融和促進論の立場から、朝鮮人と日本人の格差の解消を主張している。朝鮮人の美談・献金・社会進出などに関する新聞の評価が高いのも、この文脈にそうものである。

4 新聞が報じる民族関係のパターン
 ((9)日本人の朝鮮人に対する性向×(10)朝鮮人の日本人に対する性向, (11)日本人と朝鮮人の友好度)

表12は、日本人と朝鮮人の性向をクロスさせたものである。日本人だけを見ると求心的な傾向を示す記出が、遠心的な傾向を示す記事の約2.5倍を示し、一方、朝鮮人についてみると、求心的が遠心的をやや上まわるが、ほぼ同数を示している。この結果から単純に結論を引き出すとすれば、日本人と朝鮮人の関係は、日本人=求心的、朝鮮人

表10 内容分類×見出し段数(記事重要度)

	1 段	2 段	3 段	4 段以上	合 計	重要度スコア
① 朝鮮問題一般, 朝鮮政策	11 36.7	16 53.3	2 6.7	1 3.3	30 100%	1.8
② 在日朝鮮人政策・社会事業	14 36.8	10 26.3	9 23.7	5 13.2	38 100%	2.1
③ 朝鮮人の社会問題	1 9.1	6 54.5	2 18.2	2 18.2	11 100%	2.5
④ 朝鮮人の社会運動	9 27.3	13 39.4	10 30.3	1 3.0	33 100%	2.1
⑤ 朝鮮人の左翼運動	3 11.1	12 44.4	10 37.1	2 7.4	27 100%	2.4
⑥ 暴力犯罪	16 43.2	10 27.1	9 24.3	2 5.4	37 100%	1.9
⑦ 一般犯罪	8 21.1	16 42.0	12 31.6	2 5.3	38 100%	2.2
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出	11 40.7	10 37.1	4 14.8	2 7.4	27 100%	1.9
⑨ その他の出来事	8 40.0	9 45.0	2 10.0	1 5.0	20 100%	1.8

表11 内容分類×新聞の朝鮮人評価

内容分類	評 価					評価得点*
	好意的 ++	やや好意的 +	どちらとも いえない ○	やや 非好意的 -	非好意的 --	
① 朝鮮問題一般、朝鮮政策	2 6.7	5 16.7	23 76.6	0 0	0 0	+0.3%
② 在日朝鮮人政策・社会事業	3 7.9	10 26.3	24 63.2	1 2.6	0 0	+0.4%
③ 朝鮮人の社会問題	4 36.4	6 54.5	0 0	0 0	1 9.1	+1.1%
④ 朝鮮人の社会運動	0 0	1 3.0	7 21.2	13 39.4	12 36.4	-1.1%
⑤ 朝鮮人の左翼運動	0 0	0 0	1 3.8	13 48.1	13 48.1	-1.4%
⑥ 暴力犯罪	0 0	2 5.4	4 10.8	19 51.4	12 32.4	-1.1%
⑦ 一般犯罪	1 2.6	1 2.6	15 39.5	17 44.8	4 10.5	-0.6%
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出	14 51.9	6 22.2	6 22.2	1 3.7	0 0	+1.2%
⑨ その他の出来事	5 25.0	8 40.0	6 30.0	1 5.0	0 0	+0.9%

*評価得点……好意的と非好意的の間の5段階に+2から-2までのウェイトを与え、それぞれの段階ごとの記事数とウェイトを掛け、それらを合計したものを記事数で割ったもの。例えば、⑦「一般犯罪」では、次のようになる。

$$\{(+2) \times 1 + (+1) \times 1 + 0 \times 15 + (-1) \times 17 + (-2) \times 4\} \div 38 = -0.6$$

表12 記事中の民族関係のパターン (変数⑨×⑩)

		⑩朝鮮人の日本人に対する性向			合 計
		求心的	中庸的、ふ れていない	遠心的	
⑨ 日本人の朝鮮人に対する性向	求心的	20 (7.7%)	50 (19.2%)	4 (1.5%)	74 (28.4%)
	中庸的・ふ れていない	23 (8.8%)	82 (31.3%)	54 (20.7%)	159 (60.8%)
	遠心的	20 (7.7%)	8 (3.1%)	0 (0.0%)	28 (10.8%)
合 計		63 (24.2%)	140 (53.6%)	58 (22.2%)	261 (100%)

=求心的というパターンとなり、シェマホーンのいう「同化・合同」タイプの民族関係であるということになる。しかし、ここで注意しなければならないのは、このような求心—求心型のパターンを示す記事の多くが、融和・美談記事などの新聞の内鮮融和宣伝の一端をになう記事によって占められている点である。表13-Aは、求心—求心型の記事が、どのような内容の記事によって占められているかを示したものである。この表から分か

ることは、新聞による内鮮融和の美談記事が、新聞紙面上に、あたかも日朝間で「同化・合同」が進行しつつあるかのような印象を強く漂わせるのに非常に大きな役割を果している点である。もし、これらの作為的要素を排除するなら、日朝間の民族関係のパターンは、シェマホーンのいう「抵抗をとまなう同化」のタイプ（支配的民族集団=求心的、被支配的民族集団=遠心的）に近いものとなる。シェマホーンは、このタイプが出現するケースとして、近代の帝国主義国家とその併合地域の関係を挙げているが、この指摘は、以上の分析結果からも、ある程度あたっているといえる。

ただ、求心的と遠心的とからなる四通りの組み合わせを個々にみると、先程みた、求心—求心型（「同化・合同」タイプ）と同程度に、遠心—求心型（「分離」タイプ）があらわれている。表13-Bは、遠心—求心型の記事の内容別のうちわけを示すものである。朝鮮人の社会問題、朝鮮人の社会運動などの記事によって、このタイプ記事は占められていることがわかる。朝鮮人の社会問題の多くは、住宅問題であり、スラム化の問題である。一方、朝鮮人の社会運動の中には、労働争議や差別に反対する組織行動などがふくまれている。これらの点を考えると、この表からは、日本の社会

表13 「同化・合同」型記事と「分離」型記事の内容別本数

	A「同化・合同」型記事 日本(求)ー朝鮮(求)	B「分離」型記事 日本(遠)ー朝鮮(求)
① 朝鮮問題一般、朝鮮政策	2	0
② 在日朝鮮人政策・社会事業	6	0
③ 朝鮮人の社会問題	0	6
④ 朝鮮人の社会運動	0	4
⑤ 朝鮮人の左翼運動	0	2
⑥ 暴力犯罪	0	3
⑦ 一般犯罪	0	3
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出	9	0
⑨ その他の出来事	3	2
合計	20	20

の中で日本人と平等の処遇を求めている朝鮮人に対して、日本の社会の側が、これらの人々をスラムに囲い込んだり、また、就業機会において差別したりしているという構造が浮かびあがってくる。この遠心ー求心型（「分離」タイプ）の記事数が、求心ー求心（「同化・合同」タイプ）と同程度、新聞に出現するという事実は、新聞の掛声とは裏腹に、日本の社会の中に、朝鮮人に対する排斥の態度が濃厚に存在していたことを示しているといえよう。

一方、遠心ー遠心型（「多元主義」タイプ）が全くみられないのは、朝鮮の植民地支配を肯定する日本社会の一般的風潮と、それを反映する新聞においては、当然予想されることである。ただ、歴史的にみれば、多元主義の社会理論の登場は、アメリカにおいても公民権運動以降のものであ

り、まして、植民地主義全盛の1930年代の日本で、そのような立場の存在が、商業ジャーナリズムにおいて確認されるような可能性は、ほとんど無に等しかったというべきだろう。

今、日朝間の民族関係をシェマホーンの図式をかりて「抵抗をとまなう同化」タイプとした。ところで、それが、はたしてほんとうに「抵抗をとまなう」ているかどうかを、次に、朝鮮人の日本人に対する性向×日本人と朝鮮人の間の友好度をクロス分析して検討してみた。表14は、その結果を示すものである。粗集計の結果でも、非友好的が友好的を上まわっていることが示されているが、さらに表からは、朝鮮人の日本人に対する性向が、遠心的である方が、日本人と朝鮮人の間の友好度は、低くなっていることが読める。これに似た傾向は、日本人の朝鮮人に対する性向×日朝

表14 各民族の性向×日本人と朝鮮人の間の友好度

性 向		友好度					合 計	友好度スコア*
		非常に友好的 ++	友好的 +	どちらでもない ○	対立的 -	敵対的 --		
日 本 対 す る 朝 鮮 人 の 性 向	求 心 的	19 25.7	23 31.1	26 35.1	2 2.7	4 5.4	74 100%	+0.7
	中庸的 ふれていない	9 5.7	7 4.4	70 44.0	31 19.5	42 26.4	159 100%	-0.6
	遠 心 的	0 0	1 3.6	5 17.9	14 50.0	8 28.6	28 100%	-1.0
朝 鮮 対 す る 日 本 人 の 性 向	求 心 的	21 33.3	12 19.0	7 11.1	15 23.8	8 12.7	63 100%	+0.4
	中庸的 ふれていない	6 4.3	19 13.6	87 62.1	22 15.7	6 4.3	140 100%	0
	遠 心 的	1 1.7	0 0	7 12.1	10 17.2	40 69.0	59 100%	-1.5

*友好度スコア……友好度に関する5段階のステップに+2から-2までのウェイトを与え、それぞれのステップごとの記事数とウェイトを掛け、それらを合計したものを記事数で割ったもの。計算方法は「評価得点」と同様。

間の友好度のクロスについてもいえ、日本人の性向が、遠心的である方が、求心的である場合よりも友好度が低いという結果が得られる。しかし、その程度をみると、朝鮮人が遠心的である場合の方が、より顕著に友好度が低い。したがって、この結果は、ここで分析された日本人と朝鮮人の間の民族関係が、シエマホーンのいう「抵抗をともなった同化」タイプに属するための要件を満たすものであるといえる。と同時に、この結果は、支配的民族集団の性向が求心的、被支配的民族集団の性向が遠心的、という組み合わせのパターン(求心—遠心型)の場合、2つの民族間で、非友好的関係が友好的関係より強くあらわれるということを示すものであり、シエマホーンの2つの民族間の性向が異なる場合にはコンフリクトが生じるという仮説を支持するものである。

5 新聞の朝鮮人に対する評価 (12新聞の朝鮮人に対する評価×(6)見出し段数・(7)記事量)

最後に、新聞の朝鮮人に対する評価に関連するいくつかのクロス分析を検討してみることにした。内容分類とのクロスは、すでに検討したので、見出し段数とのクロスをとらあげ、新聞が記事に与えた重要度と新聞の評価の関係をみってみる。(表15) この表をみると、新聞が記事に対して与えた重要度は、朝鮮人に対する評価が、好意的か非好意的かいづれかの極に寄るほど高く、逆に、評価が中庸になるに従って、重要度は低くなるという傾向が読める。一方、全体的に、朝鮮人に対する新聞の評価は、ややマイナスに傾いているが、中でも、見出しが三段の記事が、もっとも朝鮮人に

対する評価が非好意的であることが分かる。どちらかという目立ちやすい記事に、マイナスの評価が顕著であるということは、新聞が朝鮮人に対して非好意的評価を与えているという印象を受け手に強く与えたと考えてよいだろう。

これを、さらに記事量との関連でみると次のようになる。表16は、記事量のレベル別の評価得点(新聞の朝鮮人に対する評価)である。ここでは、

表16 記事量別の評価得点

記事量	記事数	評価得点
1—50未満コラム×cm	38	-0.3
50—100未満	73	-0.2
100—150未満	50	-0.1
150—200未満	36	-0.5
200—300未満	30	-0.2
300以上	34	+0.1
合計	261	-0.2

1-50コラム×センチの小さい記事と、150—200コラム×センチの「中の大」程度の記事に、マイナスの評価が強く現われる傾向が示され、300コラム×センチを越える記事では、むしろプラスに傾いている。小さい記事にマイナスが強く出たのは、犯罪記事にこの位の大きさのものが多いためであり、一方、300コラム×センチ以上の記事にプラスが出たのは、社説にこの位の量の記事が多いことと関連し、新聞が公式的言論においては、被植民地民衆に対して、やや好意的な態度をとったことを示している。先述の内容分類と見出し段数のクロス分析で検討した結果をここで振り返ってみれば、朝鮮人の政治運動や社会運動などに対して、新聞は比較的大きな取り上げ方をしていた。非好意的評価が強く現われる「中の大」の記事とは、

表15 新聞の朝鮮人評価と見出し段数 (記事重要度)

評価	見出し段数				合計	重要度スコア
	1 段	2 段段	3 段	4 段以上		
好意的 ++	3 10.3	15 51.7	8 27.7	3 10.3	29 100%	2.4
やや好意的 +	14 35.9	14 35.9	8 20.5	3 7.7	39 100%	2.0
どちらともいえない ○	37 43.0	31 36.0	12 14.0	6 7.0	86 100%	1.8
やや非好意的 -	23 35.4	27 41.5	14 21.5	1 1.6	65 100%	1.9
非好意的 --	4 9.5	15 35.7	18 42.9	5 11.9	42 100%	2.6
評価得点	-0.1	-0.1	-0.4	-0.1	-0.2	

これら朝鮮人の政治，社会運動に関する記事に該当するものであろう。全体的にみれば，朝鮮人の政治運動や社会運動などに対して与えられたマイナス評価の強さと，同時にこれらの事柄に新聞が与える重要度の高さが，全体として新聞の朝鮮（人）関連記事における朝鮮人評価をマイナスの方向に強く牽引する要因となったといえる。

6. 多次元分析の結果と考察

A 全変数の分析

最初に本研究で分析に使用した12変数（47カテゴリー）をすべて使用して，林式数量化理論第Ⅲ類によるパターン分析を行なった。根の析出は，第3根まで行なった。分析の精度を示す固有値（ ρ ）は，次のとおりである。

- 第1根……0.3065 第2根……0.2549
- 第3根……0.2223

1 根の解釈

結果として，分析にとりあげた12変数（47カテゴリー）のカテゴリー・スコアは表17の示すとおりであり，各根の内的意味は次のように解釈された。

〈第1根〉 日本人と朝鮮人の友好度の良好—険悪を分ける軸

この軸のプラスの方向には，日本人と朝鮮人の関係が，友好的で良好な状態を示すカテゴリーが集まっており，逆にマイナスの方向には，日本人と朝鮮人の関係が，非友好的で険悪な状態を示すカテゴリーが集まっている。新聞の朝鮮人に対する評価の好意—非好意度も，この軸のプラスの方向で好意的，マイナスの方向で非好意的を示し，

あざやかに分解している。したがって，新聞の評価と日朝間の友好度との相関は非常に強いものがあるといえる。そのほか，プラス方向には，「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「在日朝鮮人の社会政策・事業」「日本人の性向＝求心的」「その他の出来事」「朝鮮問題一般，朝鮮政策」「特殊記事」などのカテゴリーが集まっている。これらのカテゴリーの集まり方からみて，この軸は，日本人と朝鮮人の関係の良否を示す軸であることがわかる。

〈第2根〉 記事の内容の情緒性，イメージ性の強—弱を分ける軸

第2軸のプラスの方向には，「友好度＝友好的」「美談・献金・社会進出」「新聞評価＝好意的」「朝鮮人の性向＝求心的」などの融和的擬似イベント記事を暗示するカテゴリーが集まると同時に，「150—200コラム×センチ」，「写真有」，「見出し3段」などの中型の記事群を構成するカテゴリーが集まり，また，「日朝間＝敵対的」，「左翼運動」，「日本人の性向＝遠心的」などの日朝間の関係が険悪である状態を示すカテゴリーも集まっている。これらは，記事のもつイメージが明瞭で，論理性より情緒に訴える傾向の記事がもっていることを示している。

一方，マイナスの方向では，「特殊記事」「朝鮮問題，朝鮮政策」，「300コラム×センチ以上」など，主に，社説やコラム，解説などの論理性の傾向が強い記事群を示すカテゴリーが集まると同時に，「新聞の評価＝中庸」，「友好度＝中庸」，「朝鮮人の性向＝中庸」など，記事の情動性やイメージ性の弱い，地味な記事を示すカテゴリーが集まっている。見出し段数「1段」，記事量「1—50コラム×センチ」という小さな記事を示すカテゴリー

表17 全12変数のカテゴリー・スコア
(数量化第Ⅲ類による NORMALIZED SCORE)

変数	カテゴリー名	根	第1根	第2根	第3根
		固有値(ρ)	0.3065	0.2549	0.2223
① 内 容	1. 朝鮮問題一般・朝鮮政策		2.0884	-6.6941	-5.5833
	2. 在日朝鮮人政策・社会事業		3.1994	-0.5536	0.3848
	3. 朝鮮人の社会問題		1.9527	2.8560	-0.1898
	4. 朝鮮人の社会運動		-4.1305	0.5952	-1.0365
	5. 朝鮮人の左翼運動		-5.3777	1.0439	-3.4630

分類	6. 暴力犯罪	-1.1442	-0.7449	4.0169
	7. 一般犯罪	-0.4890	-0.3366	4.4406
	8. 美談・献金・朝鮮人の社会進出	3.4115	6.1105	-2.5797
	9. その他の出来事	2.2295	0.8994	1.7474
②掲載時時	10. 前期（満州事变まで）	-0.3589	-1.3212	0.7238
	11. 中期（「移住対策の件」まで）	0.3085	2.0943	-2.0642
	12. 後期	0.5811	0.1273	1.8557
③言及地	13. 朝鮮「外地」	-1.6324	-3.0590	-4.1985
	14. 日本内で大阪以外	-1.1420	-1.1455	2.1866
	15. 大阪府下	0.8453	1.4656	1.5640
④記事形態	16. 一般記事	-0.1572	0.6190	0.5208
	17. 特殊記事	2.1217	-8.3564	-7.0314
⑤写真使用	18. 写真使用	0.8493	1.1169	-4.1954
	19. 写真不使用	-0.0940	-0.1236	0.4642
⑥見出し段数	20. 1段	1.0399	-1.3403	2.2629
	21. 2段	-0.1266	0.2291	0.0007
	22. 3段	-1.3132	1.4354	-1.9397
	23. 4段以上	0.4153	-0.0515	-3.7216
⑦記事量	24. 1～50未満 Column×cm	1.0830	-1.5587	3.9428
	25. 50～100 〃	0.0724	0.5321	2.2946
	26. 100～150 〃	-0.2266	1.3330	1.0786
	27. 150～200 〃	-0.8099	1.7199	-1.8965
	28. 200～300 〃	-1.0455	0.9641	-4.0682
	29. 300 〃 以上	0.7471	-4.0325	-5.3222
⑧刊別	30. 朝刊	0.6157	-0.0618	-0.0732
	31. 夕刊	-2.6639	0.2672	0.1608
⑨日本人に対する朝の性向	32. (日本人) 求心的	2.7044	0.2377	-1.9821
	33. どちらともいえない, 言及なし	-1.2446	-0.2766	0.5267
	34. (日本人) 遠心的	-0.0794	0.9425	2.2473
⑩日本人に対する朝の性向	35. (朝鮮人) 求心的	1.8099	3.8647	-0.4764
	36. どちらともいえない, 言及なし	1.1557	-2.0239	1.1133
	37. (朝鮮人) 遠心的	-4.7557	0.6876	-2.1697
⑪日本人と朝鮮人の友好度	38. 非常に友好的	3.7533	6.4936	-4.0811
	39. 友好的	3.1736	0.0342	-2.0498
	40. 普通・どちらともいえない	1.0903	-2.6683	0.8961
	41. 対立的	-1.1026	0.4213	3.9305
	42. 敵対的	-4.8478	1.2373	-1.8042
⑫新聞に対する朝鮮人の評価	43. 好意的	3.3849	6.0940	-3.6825
	44. やや好意的	2.5727	0.8452	-1.0004
	45. どちらともいえない	1.6291	-3.0744	0.1882
	46. やや非好意的	-2.5104	0.4576	3.3435
	47. 非好意的	-4.1769	0.5945	-2.0883

も、マイナス方向から集まっている。したがって、このような傾向から解釈して、第2軸はプラスの方向で、記事の内容の情緒性が強く、表現上のイメージの派手さを示し、マイナス方向で、情緒性が弱く、表現上のイメージの地味さを示す軸と考えることができる。

〈第3根〉 紙面上の扱いの大=小を分ける軸

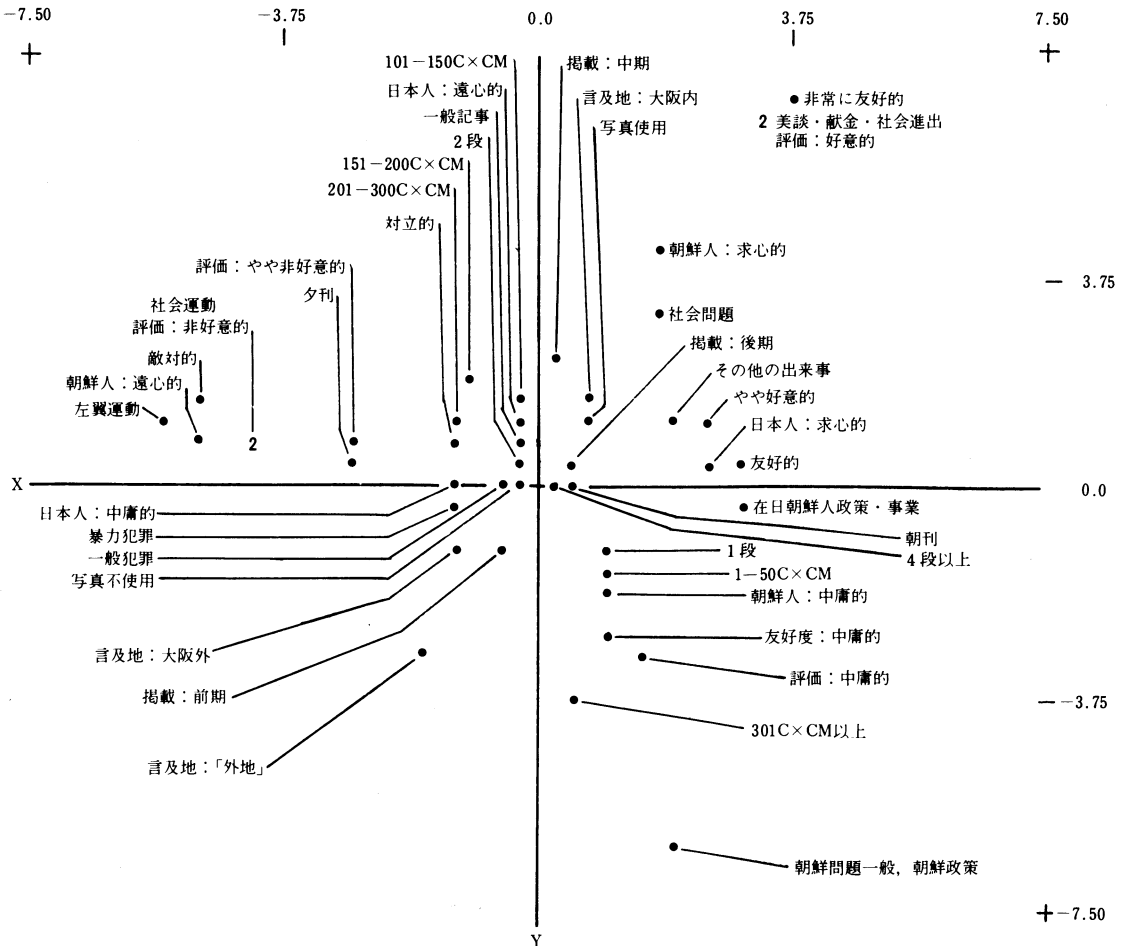
この軸のプラス方向にゆくほど、記事量は小さく、見出し段数は小さくなり、逆に、マイナス方向にむかうほど記事量は増大し、見出し段数も多くなる。したがって、この軸は記事の紙面上の扱いの大=小を示す軸と解釈することができる。マイナス方向(紙面上の扱い=大)では、「特殊記事」

(社説やコラム)、解説的内容で字数の多い「朝鮮問題一般、朝鮮政策」、スペースを大きく使う「写真有」などのカテゴリーが集まり、プラス方向(紙面上の扱い=小)では、「一般犯罪」、「暴力犯罪」、「日朝間=対立的」、「新聞の評価=やや非好意的」などの扱いが小さいことを示すカテゴリーが集まっている。

2 第1軸×第2軸上のカテゴリー・プロットの分析

これら3軸のうち、まず第1軸と第2軸を用い、分析を行なうことにする。第1軸を横軸(X軸)、第2軸を縦軸(Y軸)原点で直交させて作った二次元空間上に、47カテゴリーをプロットしたも

(図18)



のが図18である。この二次元空間がもつ性格は、第1象限(++)では、日本人と朝鮮人の関係が良好でなかつ、記事内容が情緒的で、イメージが強いことを示し、第2象限(-+)では、日本人と朝鮮人の関係は険悪であり、かつ、記事内容が情緒的で、イメージが強いことを示し、第3象限(--)では、日本人と朝鮮人の関係は険悪であるが、記事内容は情緒的ではなく、地味なイメージであることを示し、第4象限(+-)では、日本人と朝鮮人の関係は、良好であるが、記事の内容は情緒的ではなく、イメージ的に地味であることを示している。図からわかるように、この二次元空間上で、47のカテゴリーは、いくつかのまとまりを示し、1930年代の朝鮮(人)報道に、いくつかのパターンが存在したことを示した。

まず、内容的には、美談・献金・朝鮮人の社会進出を扱い、日朝関係を友好的に報じ、朝鮮人に対しても好意的な評価を与える記事群が、第一象限の右上の最端に布置された。この記事群は、紙面の扱いも情緒的(Y軸プラス)で擬似イベントの匂いが非常に強い。この記事群は「融和美談」型とでもよべるものである。これと同じ傾向を示しながらも、その程度において前者ほどでもないのが、「朝鮮人の社会問題」をあつかった記事群である。このカテゴリーと、「朝鮮人の性向=求心的」とが近接して布置されているということから解釈して朝鮮人が日本人の社会に対して平等な処遇を求めている(求心的)にもかかわらず、それが与えられないという状態が社会問題として現われているのだということがいえる。新聞は、これら社会問題については、朝鮮人に対して好意的な報道をしている。一方、第2象限では、「朝鮮人の左翼運動」、「朝鮮人の社会運動」など、朝鮮人側の組織的抵抗を示すカテゴリー群が「日朝間=敵対」、「朝鮮人の性向=遠心的」、「新聞の朝鮮人評価=非好意的」のカテゴリーと一群となって布置されている。ただ、この記事群は、記事内容について、やや情緒的でややはっきりしたイメージを示すものの、先述の「融和美談型」の記事群にくらべて擬似イベントの色彩は少ない。第3象限では、特徴的なパターンは、示されなかった。第4象限では、「朝鮮問題一般、朝鮮政策」「300コラム×センチ以上」などのカテゴリーが、「友

好度も中庸」「新聞の朝鮮人評価も中庸」という非情緒性を示すカテゴリー群とひとまとまりになって現われた。この記事群は、いわば「社説・解説型」記事のパターンを示すものと理解できる。ただ、この記事パターンも、X軸のややプラス側に布置されていることからわかるように、日本人と朝鮮人の関係をやや良好なものとして表現しているということがわかる。次に「在日朝鮮人の社会事業・社会政策」、「その他の出来事」を示すカテゴリーと「日本人の性向=求心的」「日朝間=やや友好的」「新聞の朝鮮人評価=やや好意的」などのカテゴリーがひとまとまりになって、X軸上、プラス側よりに布置されている。この記事群は、「融和美談型」の擬似イベント記事タイプと「社説・解説型」記事の中間の傾向を示す記事群ということになる。その他、原点のやや左よりのあたりにこの二つの軸とのかかわりの小さい残りの諸カテゴリーがまとまって現われた。この中には、犯罪記事などがふくまれているが、いわば、雑報としての一般報道記事が、まとまって布置されているといえる。記事の情緒性では中庸を示しながらも、やや低い朝鮮人評価を示しているのがこの記事群の特徴といえる。

結果を全体的にみて、日本人と朝鮮人の関係を良好なものとして扱い、好意的な評価を朝鮮人に与えた記事群は、擬似イベント的で情緒的な「融和美談型」の記事と、非情緒的で地味な色彩をもつ「社説・解説型」の記事の二つの方向に分解化する傾向を示した。これに対し、日本人と朝鮮人の関係を険悪なものとして扱い、朝鮮人に対し、非友好的評価を与える記事群は、分解せず、ひとつにまとまる傾向を示した。友好度の良好な側(X軸のプラス方向)で、記事にいろいろなパターンが現われたということは、新聞の「内鮮融和」のシンボル操作が、さまざまなバリエーションをもっていたことを暗示しており、そこに新聞のある種の積極性を感じることもできよう。

3 掲載時期別の第2軸のケース・スコア平均

次に、第2軸(記事内容の情緒性、イメージ性の強一弱)のケース・スコアの掲載時期別の平均を求めて、新聞の朝鮮(人)報道の表現傾向が、

時期によってどのように変化してきたかをみてることにする。

掲載時期が前期の記事群のケース・スコアの平均は、 -0.3368 、中期の平均は、 -0.5338 、後期の平均は、 0.7928 、となった。これは、後期に掲載された記事群がもっとも高い情緒性、イメージ性をもつことを示している。先述の第1軸×第2軸の分析では、「融和美談型」の記事群と「社説・解説型」の記事群が記事の情緒性、イメージ性の強一弱の両端を示すことがあきらかになった。これに、この分析の結果を考えあわせると、「社説・解説型」の記事は、早い時期に掲載され、「融和美談型」の記事は、遅い時期に掲載されたということがおおよそいえる。これを歴史的にみれば、新聞が戦争体制への移行の中で、報道のファナティズムを強め、「国民」の統合性をより強調するようになっていったことと関連があるものと思われる。

B 記事の非内容的側面の分析

記事形態、掲載時期、記事量、写真の有無、見出し段数、言及地、朝一夕刊別、の変数群を数量化理論第Ⅲ類を使って、5根まで分析した。各根の固有値(ρ)は次のとおりである。

第1根……0.2933	第2根……0.2709
第3根……0.2125	第4根……0.2034
第5根……0.1698	

1 根の解釈とカテゴリー・プロットの分析

各根の内的意味を解釈した結果、第1根はプラス方向で記事量、見出し段数が小さくなり、マイナス方向でそれが大きくなること、さらに、社説やコラムなど紙面上で特別な扱いをうけていることを示す「特殊記事」がマイナスの方向に強く現われていることから、紙面上の扱いの小=大(プラス方向=小、マイナス方向=大)を分ける軸であることがわかった。また、第2根と第5根は、それぞれ記事掲載時期の前-後をわける軸(第2軸の場合、プラス方向=前、マイナス方向=後、第5軸の場合、プラス方向=後、マイナス方向=前)を意味していることがよみとれた。第3根と第4根は、明解な意味を示さなかった。そこで、

この5つの軸から、第1軸と第2軸とを選び、この2つの軸によって構成される二次元空間上に分析した変数群の各カテゴリーを布置した。(図19)この図から、各カテゴリー間の関係をみてみると、次のようなことがいえる。まず、記事量が小さい「1—50未満コラム×センチ」や「50—100未満コラム×センチ」の記事群と反対に記事量の大きい「300以上コラム×センチ」の記事群は、Y軸方向のプラス側に布置され、逆に、記事量の中から中の大の規模のカテゴリー一群(「150—200未満」「200—300未満」)は、Y軸のマイナス方向に布置されている。Y軸は、時間に関する軸であることから、この布置のされ方をよむと、記事量の小さな記事群、逆に大きな記事群は、時間的に早い時期に掲載が集まり、一方、記事量が中の大の規模の記事群は、時間的に遅くなってからの方が、ウエートが増してくることがわかる。Y軸との関係において、他のカテゴリーの特徴をみると、言及地で「大阪以外、日本内」がプラス方向(早い時期)に布置されていることがあげられる。

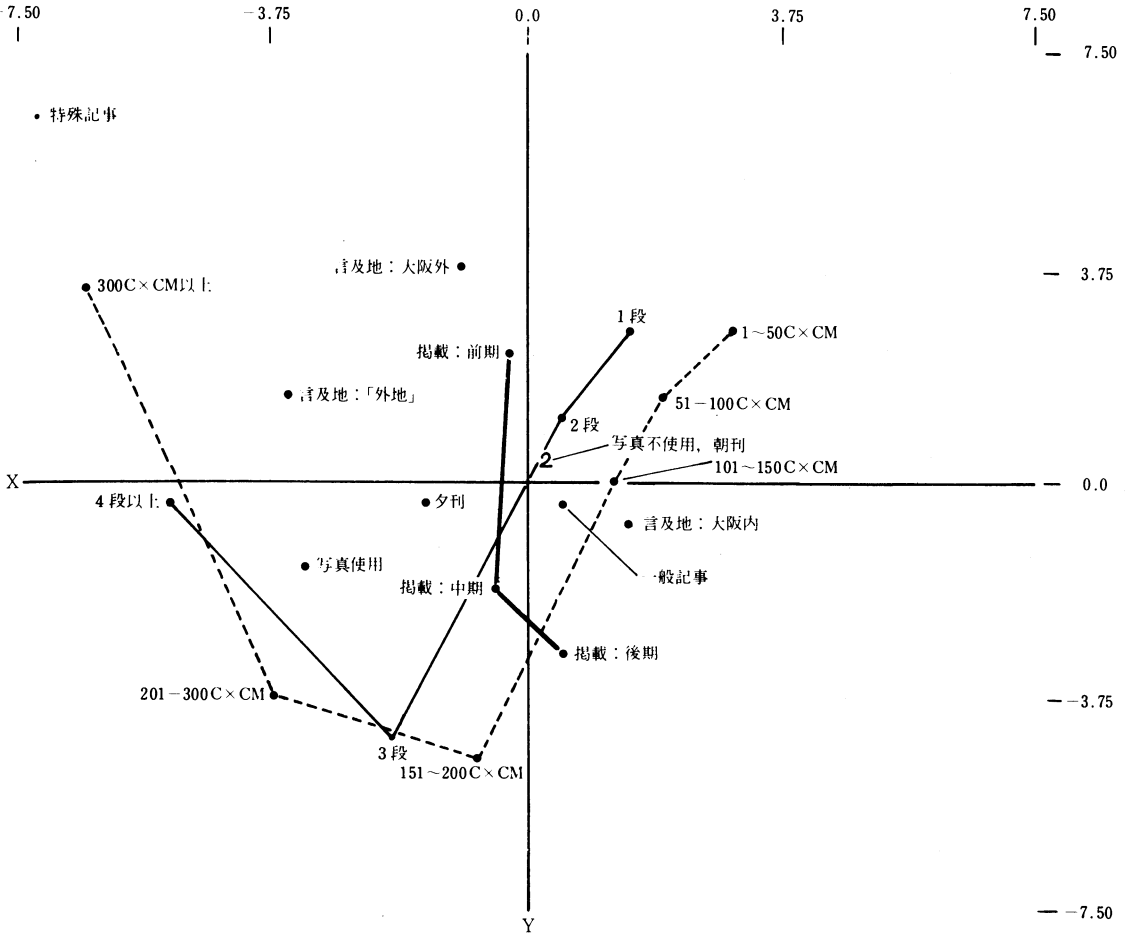
一方、X軸は、紙面上の小-大を分ける軸であるが、この軸との関係で、他のカテゴリーの特徴をとらえてみると、次のようなことがいえる。まず、「朝鮮、外地」の記事群は、Y軸のマイナス方向に布置され、相対的に記事量が大きい。これに対し、「大阪府下」は、X軸のややプラス方向に布置され、相対的に記事量が小さい。また、「写真使用」は当然ながら、「写真不使用」より扱いが大きく、夕刊の方が朝刊よりも全体的にみて、記事量が大きいといえる。

X軸の両方において強い特徴を示すものは、「特殊記事」である。「特殊記事」とは、社説やコラム、解説などを示すカテゴリーであるが、この図における「特殊記事」の布置は、言論記事の一般的特徴である行数の多さ(記事量=大)という性格を示すとともに、クロス分析のところでも触れたように、朝鮮関係の社説が時間とともに急速に後退するという朝鮮関連言論記事の固有の特性も同時に示すものといえる。

2 記事内容と記事形態との関係

次に、この二つの次元に関して内容分類(変数1)の各カテゴリーを構成するケース群のケース

(図19)



・スコアの平均を求め、この二つの軸と記事の内容分類との関係を分析した。ここでの関心は、パターン化にあるのではなく、記事の内容分類の側面と記事の非内容的側面（形態，時期，記事量な

ど）とが、どのように切り結ぶかをみることである。

表20は、内容分類カテゴリー別の第1軸と第2軸に関するケース・スコアの平均を示すものであ

表20 内容分類カテゴリー別のケース・スコア平均

	第一軸 記事量に関する軸	第二軸 掲載時期に関する軸
① 朝鮮問題一般，朝鮮政策	-1.2272	1.1007
② 在日朝鮮人政策・社会事業	0.2620	-0.1313
③ 朝鮮人の社会問題	-0.1774	-0.0488
④ 朝鮮人の社会運動	-0.1142	-0.8896
⑤ 朝鮮人の左翼運動	-0.4550	-0.2819
⑥ 暴力犯罪	0.3355	0.1517
⑦ 一般犯罪	0.3296	-0.3723
⑧ 美談・献金・朝鮮人の社会進出	0.4007	-0.3607
⑨ その他の出来事	0.4552	0.0662

る。

第1軸(扱いの大一小)に関しては、ケース・スコアの平均の大きい順にカテゴリーを並べれば、「朝鮮問題一般、朝鮮政策」「朝鮮人の左翼運動」「朝鮮人の社会問題」「朝鮮人の社会運動」「在日朝鮮人の社会政策・社会事業」「一般犯罪」「暴力犯罪」「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「その他の出来事」の順になる。この結果と、クロス分析で行なった内容分類×見出し段数のクロスの結果(表10)とを比較すると、全体としては、同じような結果を示したが、ひとつだけ、非常に異なった結果を示したのは、クロス分析の結果においては低い重要度スコア(見出し段数平均=1.8)しか示さなかった「朝鮮問題一般、朝鮮政策」の記事群が、第1軸においては、もっとも紙面上の扱いが、大きいとされていることである。このような結果を示した原因は、このカテゴリーに属する記事群の多くが、全変数の分析(A)においても示されたように、社説・解説記事によって占められているため、記事量は大きいが見出しは地味、という社説・解説型記事の特徴が大きく結果に反映されたからである。つまり、単純な見出し段数平均では低い値しか示さなかったものの、紙面上の扱いのトータルな評価を示す第1軸におけるケース・スコアの平均では、記事量の大きさや「特殊記事」であることなどのファクターが作用して評価を上昇させ、結果として高い値を示したといえよう。この結果は、多くの変数を同時に操作できる数量化理論による分析の精度とリアリティーの高さを示すものである。

第2軸(掲載時期の早い—遅い)に関しては、ケース・スコア平均の大きい順(掲載時期が早いものがプラス方向)から、「朝鮮問題一般、朝鮮政策」「暴力犯罪」「その他の出来事」「朝鮮人の社会問題」「朝鮮人の社会運動」「在日朝鮮人の社会政策・社会事業」「朝鮮人の左翼運動」「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「一般犯罪」の順となった。この2軸のケース・スコア平均から得られた結果からも、「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「在日朝鮮人の社会政策・社会事業」などの「内鮮融和」型の記事は、遅い時期にあらわれることがわかった。これは、先述したように戦時体制下への移行とともに「国民の統合」を強化する方向の力

が社会そして新聞に強く動いていったことを暗示しているといえよう。

C 民族関係の分析

シマホーンの民族関係の理論枠組にもとづいて設定した3つの変数(「日本人の朝鮮人に対する性向」「朝鮮人の日本人に対する性向」「日本人と朝鮮人の友好度」と内容分類の変数を使って、数量化理論Ⅲ類による分析を行なった。根の析出は、3根まで行ない、各根の固有値 ρ は次のとおりとなった。

第1根……0.6784 第2根……0.5243

第3根……0.4680

1 根の解釈

各変数を構成するカテゴリー群のカテゴリー・スコアは表21のとおりである。これらのカテゴリー・スコアから各根の内的意味を次のように定めた。

〈第1根〉 日本人と朝鮮人の関係の良否を分ける軸

この第1軸は、全変数の分析において析出されたものと同様のものであり、プラス方向で、日本人と朝鮮人の関係が友好的を示し、マイナス方向で非友好的を示している。

〈第2根〉 記事の性格づけ、イメージ性の強—弱を分ける軸

この軸も、全変数の分析において析出された軸と基本的に同様のものである。この軸のプラス方向には、「犯罪」「友好度=中庸」「朝鮮人の性向=中庸」「朝鮮問題一般、朝鮮政策」「その他の出来事」など、記事内容にはっきりした性格づけをもたない地味な記事を示すカテゴリーが集まっているのに対し、マイナス方向には、「友好度=友好的」「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「朝鮮人の性向=求心的」「朝鮮人の社会問題」など、記事の性格づけやイメージがはっきりしている記事を示すカテゴリーが集まっている。したがって、第2軸は、記事の性格づけ、イメージ性の強—弱を分ける軸と考えることができる。

〈第3根〉 日本人と朝鮮人の性向に関する軸

第3軸は、全変数の分析においては析出されな

表21 民族関係にかかわる4変数のカテゴリー・スコア
(数量化第Ⅲ類による NORMALIZED SCORE)

変数	カテゴリー名	根	第1根	第2根	第3根
		固有値(ρ)	0.6784	0.5243	0.4680
① 内 容 分 類	1. 朝鮮問題一般, 朝鮮政策	0.9789	1.0435	-1.1531	
	2. 在日朝鮮人政策・社会事業	1.6841	-0.0446	-1.8114	
	3. 朝鮮人の社会問題	0.6880	-1.4422	5.3376	
	4. 朝鮮人の社会運動	-2.0435	-0.9192	-0.1032	
	5. 朝鮮人の左翼運動	-2.4337	-1.0192	-1.9009	
	6. 暴力犯罪	-0.2717	1.6298	0.7721	
	7. 一般犯罪	-0.1067	1.6391	1.8421	
	8. 美談・献金・朝鮮人の社会進出	1.2087	-3.3660	-0.2901	
	9. その他の出来事	0.6841	0.6201	0.4355	
⑨ 日 本 人 の 性 向 の 対 朝 す	10. (日本人) 求心的	1.4314	-0.7019	-1.4692	
	11. どちらともいえない, 言及なし	-0.6590	0.5072	-0.0299	
	12. (日本人) 遠心的	-0.0407	-1.0249	4.0525	
⑩ 朝 鮮 人 の 性 向 の 対 日 す	13. (朝鮮人) 求心的	0.7059	-2.3130	1.4488	
	14. どちらともいえない, 言及なし	0.6265	1.3502	-0.1481	
	15. (朝鮮人) 遠心的	-2.2790	-0.7466	-1.2163	
⑫ 日 本 人 と 朝 鮮 人 の 間 の 友 好 度	16. 非常に友好的	1.4846	-3.4155	-0.3896	
	17. 友好的	1.6723	-0.7783	-1.4748	
	18. 普通・どちらともいえない	0.4526	1.5440	-0.4308	
	19. 対立的	-0.4330	0.2745	3.2973	
	20. 敵対的	-2.1995	-0.9090	-1.0155	

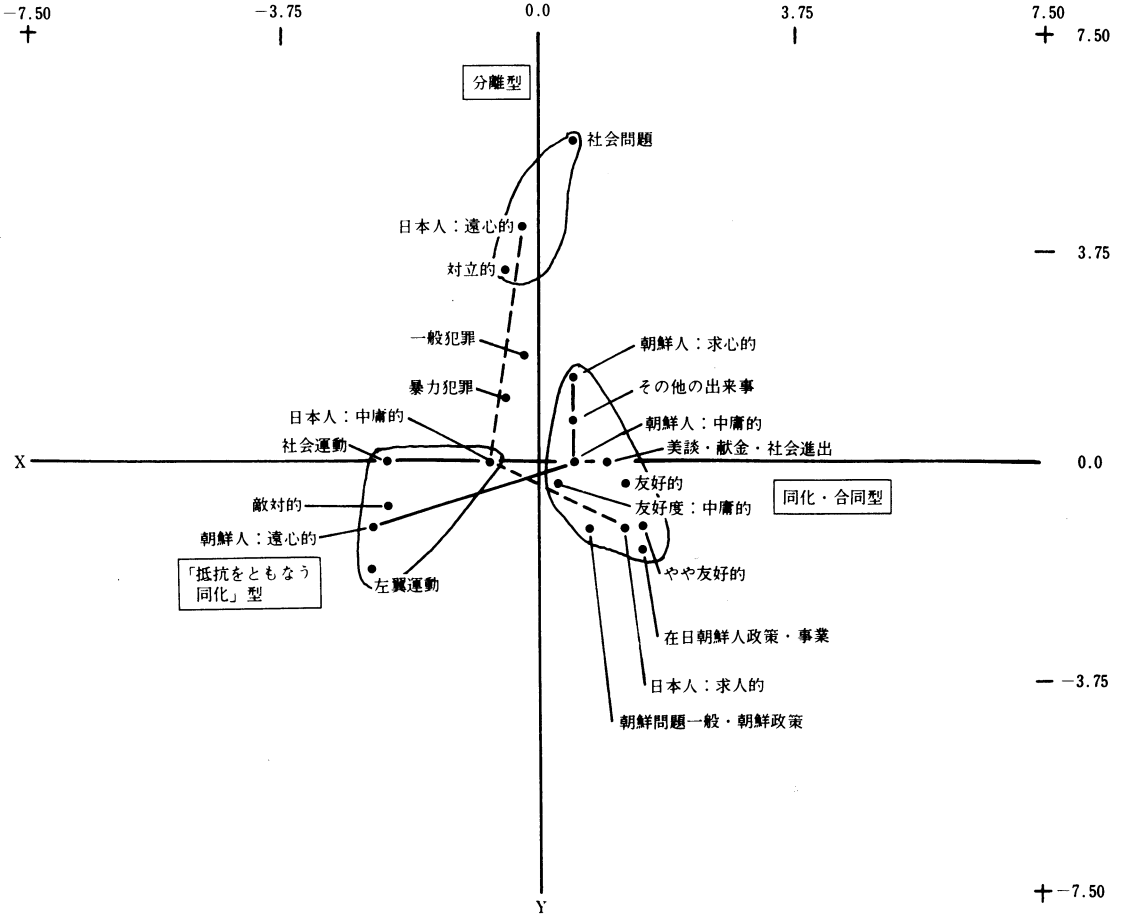
かった軸であり、日本人と朝鮮人の相互の性向にかかわる軸である。この軸のプラス方向では、日本人と朝鮮人に対する性向が、「遠心的」になり、逆にマイナス方向で、「求心的」となる。一方、朝鮮人の日本人に対する性向は、この軸のプラス方向で「求心的」、マイナス方向で「遠心的」になる。この軸においては、日本人と朝鮮人の相互の性向は、一方が「求心的」なら、他方は「遠心的」というパターンを示しており、このことはのちに考察するが、日本人と朝鮮人の関係が、実際には、建前としての「同化・合同」状態を示すのではなく、「抵抗をとまなう同化」型と「分離」型との間でゆれうごいていたことをものがたっている。しかし、カテゴリー・スコアの値から判断して、この軸とのかかわりは、日本人側の性向の方が朝鮮人側の性向よりも大きく関与しているといえる。

2 第1軸×第3軸上のカテゴリー・プロットの分析

ここで、第1軸(X軸)と第3軸(Y軸)を使って、二次元空間を構成し、それぞれのカテゴリーがどのように布置されるかをみてみたい。図22は、それを示すものである。

この布置が差し示す内的意味を考えてみたい。まず、日本人、朝鮮人のそれぞれ相互の性向(「求心的」—「中庸的, 言及なし」—「遠心的」)が、どのような布置を与えられているかをみる。「日本人の性向=遠心的」と「朝鮮人の性向=求心的」は、ともに、Y軸のプラス方向より布置され、X軸の値の絶対値はともに小さい。いま、この2つの民族性向のカテゴリーによって位置づけられる空間をひとまとまりのタイプとして考える。このタイプは、「分離」型の民族関係を示すものである。このカテゴリー群の近くには、「朝鮮人の社会問題」のカテゴリーが布置されている。これは、先

(図22)



述したように、朝鮮人の社会問題の多くが、日本社会において、職業の獲得や社会的上昇移動、権利上の平等化などの処遇をもとめる朝鮮人に対して日本社会の側が民族的差別や格差の固定などを行なうという形態をとったことに帰因するものである。このような民族関係においては、民族集団間の対立が当然予想されるが、これは、「日朝間の友好度=対立的」カテゴリーが、近くに布置されていることからよみとれる。

一方、「朝鮮人の性向=遠心的」は、Y軸のマイナス方向、X軸のマイナス方向に布置され、「日本人の態度=求心的」は、Y軸のマイナス方向、X軸のプラス方向に布置された。また、「日本人の性向=求心的」は、「朝鮮人の性向=中庸、言

及なし」と、「朝鮮人の性向=遠心的」は、「日本人の性向=中庸、言及なし」とそれぞれ近くに布置された。第1軸は、日本人と朝鮮人の関係の良否を示す軸であるから、新聞においては、日本人と朝鮮人の民族関係の良否に関して、良好と判断される場合は、その判断は、日本人の性向に深く関係し、逆に、否定的に判断される場合は、その判断は、朝鮮人の性向に深く関係しているということである。つまり、新聞は、日本人が朝鮮人に対して「求心的」な態度を示した場合、それに対して朝鮮人がどのような態度を示しているのかには、あまり関心がなく(つまり「中庸、言及なし」)、日朝間の関係を良好とみる傾向を示し、逆に、朝鮮人の性向が遠心的な場合、それをもって、日朝

間の関係が否定的な状態にあると判断している。

さて、「日本人の性向＝求心的」と「朝鮮人の性向＝中庸、言及なし」によって占められる空間の周辺には、「美談・献金・朝鮮人の社会進出」「在日朝鮮人の社会政策・事業」「朝鮮問題一般、朝鮮政策」「その他の出来事」などのカテゴリーが集まっており、この群と、「朝鮮人の性向＝求心的」のカテゴリーの位置もそれほど離れていない。これらの布置状況はこのX軸のややプラス方向のあたりか、「同化・合同」型のタイプの記事があつまっていることを示している。また、この周辺には、「日朝間の友好度＝友好的」「日朝間の友好度＝やや友好的」のカテゴリーが集まっている。

他方、「朝鮮人の性向＝遠心的」「日本人の性向＝中庸、言及なし」のカテゴリーによって占められる空間の周辺には、「日朝間の友好度＝敵対的」「朝鮮人の左翼運動」「朝鮮人の社会運動」などのカテゴリーが集まっている。ここでは、このカテゴリー群を、「抵抗をともなう同化」タイプの記事と考える。理論どおりでは、「抵抗をともなう同化」タイプの構成要件は、「日本人の性向＝求心的」「朝鮮人の性向＝遠心的」「日朝間の友好度＝対立的あるいは敵対的」の三つが、そろわなければならないのであるが、ここでは、「日本人の性向＝中庸的、言及なし」のカテゴリーの意味を、「言及なし」に引きつけて理解し、記事の背後に日本人の性向が求心的であるという傾向を読み込んで理解することにした。

また、「一般犯罪」「暴力犯罪」は、どのタイプとも結びつきが弱かった。

以上のようなパターン化においては、シマホーンの民族関係の4類型のうち、「同化・合同」型、「分離」型、「抵抗をともなう同化」型の3つが析出された。しかし、「多元主義」型の民族関係を示す記事群の存在は認められなかった。このように、3つの民族関係のタイプが析出されたということは、実際の民族関係が、ステレオタイプ化された一元的関係のパターンに類型化されてしまうのではなく、多様な型を内包し、それぞれの型どおしの力動的な関係の中から、全体としての民族関係が導き出されてくるような関係であることを示している。そして、先述のクロス分析の結果においても示されたように、これらの3つのパタ

ーンは、最終的に、全体としては「抵抗をともなう同化」の型を示す方向に収斂していったといえる。しかし、「多元主義」型の民族関係が、パターンとして析出されなかったことは、「日韓併合」を前提として、朝鮮の植民地化を当然のこととする1930年代の日本社会の対朝鮮認識を如実に反映するものといえた。もちろん、社会思想としての「多元主義」の萌芽は、この時代の日本においても、すでに一部少数の知識人や在日民族活動家の間に存在していたかもしれない。しかし、新聞ジャーナリズムによって透視しうるレベルの社会の層において、多元主義の民族関係のパターンを捉えることは、やはり不可能であったと思われる。

7. 結論

本研究において明らかになったことは、次の四点である。

1 1930年代の日本の新聞（『大阪朝日』）における朝鮮（人）関連記事は、年を追うごとに急激に減少し、ジャーナリズムの関心が一層朝鮮（人）問題から遠ざかっていったことを示している。

2 記事の内容は、時代を追うごと、情緒性、イメージ性を高める傾向を示し、戦時報道のパターンを色濃く示すようになった。

3 記事の扱いにおける重要度の傾向は、朝鮮人の自律的な諸活動（政治活動や民族運動）などに対して大きく扱い、評価は非好意的であった。逆に、美談・献金などの「融和」記事に対しては、好意的評価を与えた。

4 新聞記事において現われた日朝間の民族関係のパターンには、シマホーンの類型における「同化・合同」型、「分離」型、「抵抗をともなう同化」の3つのタイプが認められ、「多元主義」型の関係はみとめられなかった。そして、これら3つのタイプのうち、新聞紙面の見かけ上、最も有力な民族関係の型は、「同化・合同」型であった。しかし、新聞の世論操作的側面を排除し、実態としての民族関係の型を析出すると、「抵抗をともなう同化」型が、もっとも有力なタイプとして浮びあがって来た。

本研究の目的は、あくまでも計量的に、1930年

代の新聞を分析することにあり、記事内容の読み込みによる「論調分析」の方法については、その誘惑にかられながらも、つとめて避けて分析をすすめてきた。結果として、あきらかになったことは、以上のようなことであるが、本研究の最大の成果は、新聞を通じての観察という厳然とした制限が存在するものの、実際の民族関係がこれまでいわれてきたようなステレオ・タイプとしての一元的、直線的認識においてとらえられる性質のものではなく、異なったさまざまな要素間の力動的関係によって方向づけを与えられる多元的構造をもっていることを明らかにしたことである。

しかし、コミュニケーション研究として、本研究をとらえた場合、若干の問題点も残された。民族関係をマス・コミュニケーション論的な視点でとらえた場合、メディアが少数派民族集団をどのように報道するかという問題は、ホスト社会の下位民族集団に対する態度の形成と深いかかわりをもつと考えられる。本研究の観点も、ここにある。しかし、一方、マス・コミュニケーションが少数派民族集団の側態度形成や社会化にどのような影響を与えるかという問題も存在する。この2つの側面の分析が対をなして、マス・コミュニケーション研究としての民族関係研究の全体性がはじめて確保される。ただし、いわゆるマス・コミュニ

ケーションの効果・影響研究が、この第2の側面を単純にカバーしえるというわけではない。異なった民族集団が新しい社会と出会う際の基本的問題のひとつとして、言語習得の問題が存在する。少数派民族集団の側のリテラシーの低さによって、ホスト社会の側のメディアは、少数派民族の成員に対して大きな影響力をもちえない。在日朝鮮人の場合も同様で、1932年の新聞読者調査では、在日朝鮮人の日本の新聞の購読率は、5%以下にすぎない²⁹⁾。もし、マス・コミュニケーションの少数派民族集団に対する影響の問題を正確にとらえようとするなら、「移民」第二世代、第三世代の登場をも考慮に入れるか、また、マス・メディア以外の中間メディアや民族語メディアをも視野に入れた方法論が要求されるだろう。

本研究は、これら未解決の課題を残しながらも、ここで一応のまとめとし、報告を終えることにしたい。

なお、本研究で使用した数量化Ⅲ類のコンピュータ分析プログラムは、吉田文彦『QⅢ』1972年、を使用し、分析は、ハワイ大学コンピューターセンターで行なった。プログラムの使用を許していただいた吉田氏に、この場をかりて、お礼を申しあげるものである。

<注>

29) 山本武利、『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981、pp.223—224、中の『在日朝鮮人の生活状態』調査に記載。

参考文献 (アルファベット順)

・研究文献

- Appleton, Nicholas. *Cultural Pluralism in Education: Theoretical Foundations*. New York: Longman, 1983.
- 荒瀬 豊「新聞独占の形成過程」『思想』(2)1955.
- 浅田喬二『日本帝国主義下の民族革命運動』未来社、1973.
- 朝日新聞社社史編修室『朝日新聞の90年』朝日新聞社、1969.
- Barth, Ernest A.T., and Noel, Donald L., "Conceptual Frameworks for the Analysis of Race Relations: an Evaluation," *Social Forces*. No. 50.(3)1972, pp.333—348.
- Berry, Brewton, and Tischler, Henry L. *Race and Relations*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1978.
- Gordon, Milton M. *Assimilation in American Life*. New York: Oxford University Press, 1964.
- 濱 島郎, 竹内郁郎, 石川晃弘編『社会学小辞典』有斐閣、1977.
- 原田勝正「朝鮮併合と初期の植民地経営」『岩波講座・日本歴史 18 現代(1)』岩波書店、1963.
- 旗田 巍『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969.
- Higham, John. *Send These to Me*. New York: Atheneum, 1975.
- 平田賢一「『朝鮮併合』と日本の世論」『史林』57号, (5)1974, pp.103—123.
- 井上秀雄編著『セミナー日朝関係史Ⅰ』桜楓社、1969.
- 姜 東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究—1920年代を中心として—』東京大学出版会、1979.
- 姜 在彦『朝鮮近代史』日本評論社、1970.
- 〃『在日朝鮮人の65年』『季刊・三千里』8号, 1976, pp.22—37.
- 姜 徳相編『現代史資料』『朝鮮』1—5, みすず書房, 1960—1973.

- 高 峻石『南朝鮮学生闘争史』社会評論社, 1976.
- 小森徳治編『明石元二郎』原書房, 1964.
- Lee, Changsoo, and Devos, George. *Koreans in Japan*. Berkeley: University of California Press, 1981.
- 松尾尊允『民主主義者の朝鮮論』『大正デモクラシー』岩波書店, 1974.
- 中島智枝子『[日韓併合]をめぐる総合雑誌の論調について: 『日本及日本人』『太陽』『中央公論]をとおして』『部落解放研究』3号, 1974, pp.19-32.
- 岡 満男『近代日本新聞小史』ミネルバァ書房, 1968.
- 朴 慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社, 1965.
- 〃 『日本帝国主義の朝鮮支配』青木書店, 1973.
- 〃 『在日朝鮮人運動史』三一書房, 1979.
- Park, Robert E. *Race and Culture*. Clencoe: Free Press, 1950.
- Pettigrew, Thomas F., eds. *The Sociology of Race Relations: Reflection and Reform*. New York: Free Press, 1980.
- Plotonico, L., and Tuden, A., eds. *Essays in Comparative Social Stratification*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1970.
- Schermerhorn, Richard A. *Comparative Ethnic Relations: a Framework for Theory and Research*. Chicago: The University of Chicago Press, 1978.
- 徐 大粛『朝鮮共產主義運動史: 1918-1948』コリア評論社, 1970.
- 塚本三夫『近代ジャーナリズムにおける日朝関係論の構造と展開』『新聞学評論』16号, 1976, pp.85-97.
- 渡部 学『朝鮮近代史』勁草書房, 1968.
- Wirth, Louis., "The Problem of Mionrity Groups," Linton, Ralph., eds. *The Science of Man in the World Crisis*. New York: Columbia University Press, 1945.
- 山辺健太郎『日韓併合小史』岩波書店, 1966.
- 〃 『日本の韓国併合』太平出版, 1973.
- 〃 『日本統治下の朝鮮』岩波書店, 1971.
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局, 1981.
- 山中速人『日韓併合時の新聞報道と在日朝鮮人像』『在日朝鮮人史研究』4号, 1979.
- 〃 『3.1運動と日本の新聞: 『事件』報道の経過と論調分析』『新聞学評論』30号, 1981, pp.255-266.
- 安田三郎, 海野道郎『社会統計学』丸善株式会社, 1977.
- 吉岡増雄『在日朝鮮人の生活と人権』社会評論社, 1980.
- 吉岡吉典『朝鮮併合と日本の世論, 上・下』『朝鮮研究』65・72号, (9)1967, (4)1968.
- 原史料
(論文/報告書/書籍)
新井育三『内地に於ける朝鮮人と其犯罪に就て』司法省調査課, 1927.
朝鮮総督府『支那事変と半島同胞』1938.
朝鮮総督府学務局社会課『朝鮮の社会事業』朝鮮総督府, 1933.
中央協和会『国語の教へ方』中央協和会, 1942.
江木 翼『殖民政策に就て』『朝鮮文化の研究』1922.
兵庫県社会課『朝鮮人の生活状態』1937.
三木今二『内地に於ける朝鮮人とその犯罪に就いて』1932.
大阪府内鮮融和事業調査会『在日朝鮮人問題ト其ノ対策』1935.
大阪市社会部調査課『朝鮮人労働者問題』弘文堂, 1924.
〃 『本市に於ける朝鮮人住宅問題』1930.
〃 『本市に於ける朝鮮人の生活概況』1929.
〃 『本市に於ける朝鮮人の生計』1931.
〃 『なぜ朝鮮人は渡来するか』1930.
新聞用語研究会『朝鮮同胞呼称並新聞雑誌記事取扱座談会』新聞用語研究会, 1939.
白鳥庫吉『朝鮮の日本に対する歴史的 성격』『世界』5号, 1904.
〃 『我が上古に於ける韓国の勢力を論ず』『中央公論』(10) 1910.
武田行雄『内地在住半島人問題と協和事業』1938.
浮田和民『韓国併合の効果如何』『太陽』16巻3号, (10) 1910.
- (資料集)
朴 慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』1~5巻, 三一書房.
林 茂, 西田長寿編『平民新聞論説集』岩波書店, 1961.
- (雑誌・新聞)
『朝鮮』(9) 1910.
『朝鮮及滿州』
「言論の取締此極に至る(京城新報発行禁止さる)」(3) 1910.
「時問題と全朝鮮記者団会合」143号, (5) 1919.
石 鎮衡『朝鮮人より見たる日鮮同化観』66号, (4) 1913.
『報知新聞』1910. 8. 20-9. 19.
『時事新報』1910. 8. 20-9. 19.
『国民新聞』1910. 8. 20-9. 19.
『協和事業彙報』(10) 1939.
『大阪朝日新聞』1929. 1. 1-1938. 12. 31.
『東京朝日新聞』1910. 8. 20-9. 19.
『東京日日新聞』1910. 8. 20-9. 19.
『萬朝報』1910. 8. 20-9. 19.